令和６年　秋季俳句講座
「私と季語（５）」

★第３回　小澤　實
『季語と季題　本意と本情』

ぼく自身は季語と季題は別のもの、季語の本意と本情もまた、別のものと考えています。混同されがちなその二語の違いを明らかにして、季語観を深めていきたいと思っています。

動画配信日時　10月22日(火)10時より

小澤　實　略歴

昭和31年 長野県生まれ。
昭和51年 信州大学人文学部国文学専攻に入学、東明雅に師事。
昭和52年「鷹」入会、藤田湘子に師事。
昭和54年 成城大学大学院文学研究科修士課程に入学、尾形仂に師事。
昭和58年 成城大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。
平成9年 句集『立像』で俳人協会新人賞。
平成11年「鷹」退会。
平成12年「澤」創刊・主宰。
平成17年 句集『瞬間』で読売文学賞詩歌俳句賞。
平成19年『俳句のはじまる場所』で俳人協会評論賞。
令和3年『芭蕉の風景　上・下』で読売文学賞紀行随筆賞。
令和6年 句集『澤』で蛇笏賞、俳句四季大賞受賞。

現在
俳人協会常務理事
讀賣新聞・東京新聞俳壇選者
角川俳句賞・星野立子賞選考委員

季語と季題

季語に似たことばに季題という別のことばがある。
季語と季題、このふたつの意味は同じか。
もし、違うとしたら、どのような違いがあるのか。

季語『日本国語大辞典』
連歌、俳諧、俳句で、四季それぞれの季節感を表わすために、句によみこむ語。
季ことば。季のことば。四季のことば。季の題。季題。（以下略）

季題『日本国語大辞典』
連歌、俳諧、俳句で、四季それぞれの季節感を表わすために、句によみこむ題。
また、それをあらわすことば。季語。季。（以下略）

それぞれの類義語

峰の神旅立ちたまふ雲ならむ　水原秋櫻子
この句の季語は「神旅立ち」か。
「神の旅」という題から発想しているうちに「神の旅」という題が解体、「神旅立ち」、「神旅立つ」となった。
季語「神旅立つ」　季題「神の旅」

琵琶抱いて弁財天も発たれしか　平松三平
この句の季語も「神の旅」が解体し、「弁財天も発た」、季語らしくすると、「弁財天発つ」か
季語「弁財天発つ」　季題「神の旅」

ただし、季語「神の旅」　季題「神の旅」同じものも多い。

草絮に乗るもあるべし神の旅　高橋睦郎

夢見ざる眠りまつくら神の旅　小川軽舟

そのため、季語と季題とが混用されることになる。

また、近現代の俳句において、題詠という作り方は、近世（江戸時代）以前に比べ多用されなかった。句会、当季雑詠が多い。それも原因のひとつ。

さらに、現代刊行される句集は多く、編年体で編まれる。以前は季題別編集が中心だった。それもまた混用の原因のひとつ。

季題　俳句を発想させる、特定の季節に関わることば。

季語　俳句に用いられる、特定の季節に関わることば。

季題にはあるが、決してそのままでは季語として使わない、そういう語もある。

「名の草枯る」「名の木枯る」の類である。

歳時記「名の草枯る」の項には、「名の草枯る」の句はない。

鶏頭のいよいよ赤し枯るる時　長閑

枯荻に沿ひ立てば我幽なり　高濱虚子

残りたる絮飛ばさんと枯薊　中村汀女

季題　題によって整理させる機能もある。

「名の草枯る」は決して使ってはならない。「名草の芽」も。

本意と本情

本意と本情もまぎらわしいことば。
しかし、作句の際にも鑑賞の際にも重要なことば。
違いを明らかにしておきたい。

さまざまの事おもひ出す桜かな　芭蕉
この桜はどういう状態か。満開の花。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
在原業平『古今和歌集』
などが桜の本意を育てたために、さまざまな桜の状態の中から花満開に絞られる。

本意　本来あるべきもっとも詩的な状況。
本意が無ければ、和歌や俳句はイメージできず、成立しない。

鹿の本意
夕されば小倉の山に鳴く鹿の今宵は鳴かず寝ねにけらしも
舒明天皇『万葉集』

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき
よみ人しらず『古今和歌集』
鹿は秋の鳴き声が、哀切なものと固定してゆく。

ただ、本意は詠みつづけられる中で固定化してしまう危険性がある。そこで芭蕉は本情ということばを言い出した。

本情　本意を作者の実景と対した際の実感で新たに捉えなおしてゆくこと。

秀句とは、本意の上に作者による本情がたしかに加味されたものといえる。

びいと啼尻声悲し夜ルの鹿　芭蕉

衣被　近代の季語にも本意がある。本意を得た時、新季語として成立する。

衣被の本意
里芋の小芋を皮のまま蒸したもの。
つまむと皮が破れて小芋がつるりと出る
名月の料理のひとつ
身分ある女性が顔を隠すために衣をかぶったこと、きぬかづきが語源。

たべものの季語の本意　まさに口に入れた瞬間

たらちねの母と二人や衣被　竹窓
子にうつす故里なまり衣被　石橋秀野
今生のいまが倖せ衣被　鈴木真砂女
桂郎に一盞献ず衣被　浜　明史
悉く全集にあり衣被　田中裕明
くちびるにおしこまれけり衣被　田中裕明

作る際には、本意に含まれている要素を書きつけないのが基本。それは表現ではなく、説明となる。そこにいかに本情を加味していくかが、工夫となる。

読む際には、季語の本意を押さえた上で、本情それぞれのありようを探っていくことが肝要。

以上